

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第 10 回新潟 GHP 研究会

日 時 平成 20 年 2 月 23 日 (土)  
午後 2 時 15 分～  
会 場 新潟大学医学部有壬記念館

### I. 一 般 演 題

#### 1 県立小出病院におけるせん妄に対する薬物療法の現状

橘 輝・湯川 尊行・宮本 忍  
金子 尚史

県立小出病院精神科

当院におけるせん妄患者の薬物療法の現状について後方視的に検討した。

対象は平成 18 年 1 月から平成 19 年 12 月までの 2 年間に当院一般科へ入院し、精神症状のため当科を紹介され初診し、せん妄と診断された 73 例 (男性 33 例, 女性 40 例, 平均年齢 80 歳) である。なお、適応外処方である非定型抗精神病薬 (以下非定型薬) を処方するにあたり、事前に予想される副作用や期待できる効果等を十分に説明し同意を得た。

初回単剤治療は 49 例 (67%), 2 剤以上併用したものは 19 例 (26%), 頓服のみの対応は 5 例 (7%) であった。単剤での第一選択薬として最も使用頻度が高かったのは mianserin 18 例 (25%) であった。非定型薬は 17 例 (23%) に使用されており、内訳は risperidone 9 例 (12%), perospirone 7 例 (10%), quetiapine 1 例 (1%) で、olanzapine, aripiprazole の使用はなかった。Haloperidol の使用は 13 例 (18%) で、全て注射製剤であり、内服での使用はなかった。治療抵抗性や副作用出現などの問題で薬剤変更されたもの

は 19 例で、第二選択薬は quetiapine が最も多く 6 例 (8%), その他 perospirone 5 例 (7%), mianserin 4 例 (5%), risperidone 3 例 (4%), haloperidol 1 例 (1%) であった。

転帰は、改善したものが 59 例 (80.8%), 全身状態の悪化により死亡あるいは併診中止となったものが 11 例 (15.1%), せん妄の悪化により精神科病棟へ転棟したものが 2 例 (2.7%) であった。2005 年に FDA は非定型薬を高年齢認知症患者に使用することで死亡率を増加させるとの勧告を行った。今回、認知症合併 35 例中 12 例で非定型薬の使用があったが、非定型薬を使用していない群との比較では転帰や併診期間に有意な違いは認められなかった。

#### 2 認知症診断における日本語版 Neurobehavioral Cognitive Status Examination (NCSE) の臨床的有用性について — 精神科入院患者での検討

上馬場伸始\*・北村 秀明\*  
染矢 俊幸\*, \*\*

新潟大学医歯学総合病院精神科\*  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
精神医学分野\*\*

【はじめに】 Neurobehavioral Cognitive Status Examination (NCSE) は認知機能の多面的評価を目的として開発された認知機能検査で、覚醒水準、見当識、注意、言語、構成能力、記憶、計算、論理の 8 つの下位検査から成る。実施時間は約 30 分で、改訂長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) とウェクスラー成人知能検査の間に位置し、NCSE は比較的短い時間で認知機能の多面的評価が可能である。今回、精神科入院患者における認知障害のスクリーニングと認知症の類型診断に対する日本語版 NCSE の臨床的有用性と問題点について検討したので報告する。

【方法】 2005 年 1 月から 2007 年 12 月に新潟大学医歯学総合病院精神科に入院し、NCSE および HDS-R の両評価法による認知機能評価を受けた 78 名 (平均年齢 69.2 歳, 男性 37 名, 女性 41 名,